
少年と魔剣と元女神

ガンマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と魔剣と元女神

【NZコード】

N6021C

【作者名】

ガンマ

【あらすじ】

死んだはずの少年せつなは、気が付くと美しい少女が胸に剣を刺され、封印されている空間に居た。なんとその少女は記憶を失った女神様だった。果たしてこれから少年はどうなるのか。

プロローグ 世界の狭間にて

最後に見たのは、自分に向かって突っ込んでくるトラックだった。いつもと変わらない日常を過ごし、気付いたらそれは終っていた。別にせつなはそのことを気にしていなかつた。人間いつかは死ぬもので、自分はそれが少し早くやってきただけだという程度にしか感じなかつた。人が死ぬのは「ぐ当たり前のことだ。死んだところで、特にやりたい事があつたわけでも守りたい物があつたわけでもない。痛みや苦しみが大きな不安要素だつたが、終つてみれば一瞬で何がなんだかわからなかつた。

死は別にいいのだ。家族は悲しむだろうが避けられない出来事だつた。問題はその後だ。死んだその先があるなんて聞いてはいない。せつなは、目の前に広がる光景を見て小さくため息をついた。

「どうしましたか？」

話しかけてきた少女に目をやると、少女は無表情に見つめ返してきした。金髪に赤い瞳を持ついわゆるめつたに見かけない美少女だ。その姿にせつなは女神のようなといふ形容詞を付けたくなつた。だが、実際問題それはどうでもいい。普段だつたら見惚れていただろうが、今は別のところに眼が向いている。

「それ、どうしたんだ？」

少女はせつな目の目線を追い小さくああと声を上げた。

「私は封印されているのです」

その何気ない切り返しにせつなは自分の耳を疑つた。

「何だつて？」

「ですから、私は封印されているのです」

せつなはもう一度少女を観察した。少女の胸にはせつなのは長ほどもある巨大な剣が突き刺さつていた。その刀身は血のようになく、ぞくりとするような優美さだった。確かに封印されているように見えなくもない。

「えーと、なんで？」

「わかりません」

少女は本当にわからないように首をかしげた。

「私は自分の事が何も思い出せません」

せつなは思わず頭を抱えた。実際はもつと色々な事を聞くべきなのだろうが、せつなは状況のあまりの異質さに頭の中が空白になってしまった。

周囲には真っ白な空間が広がっていて、奇妙に現実味のない場所だつた。ごく普通の少年だったせつなが状況についていけなくとも無理はない。

「とりあえず、この剣を抜いてもらえませんか？」

少女はそんなせつなを見つめ無表情に言つた。せつなは少女を見つめ返し、どうにか頭を回転させた。

「その前に、状況を説明してくれないか？」

「状況、ですか」

少女は困ったようにつぶやいた。期待できそうにないと思つたせつなは、片つ端から質問を聞いていくことにした。

「君は誰？」

「わかりません」

「ここはどこ？」

「世界の狭間です」

「なにそれ？」

「世界と世界の間にある狭間です」

「……まあいいか。俺は何でここにいる？」

「私が呼んだからです」

「……どうして呼んだ？」

「この剣を抜いてもらいたかったからです」

せつなはそこで一旦言葉をとめた。普通なら信じられない話だ。しかし少女の淡々とした口調は嘘を言つてゐるようには聞こえない。

剣で地面に縫い付けられながら話す様も、話の信憑性を微妙に高め

ている。そして何より、自分の怪我一つない体がこの話を信じさせる大きな要因になっている。せつなは確かにトラックに轢かれたことを覚えている。

「俺は死んだはずだが？」
「魂を呼び込みました。相性がいいので思いのほか上手くいきました」

「……怪我は？」
「直つたようですね」

「……」

少女との会話に軽いめまいを感じて、せつなは再び言葉を止めた。少女の言葉はとんでもないが、嘘をついている様子ではない。どうやら、訳のわからないことに巻き込まれたらしい。

言葉の内容に関してはせつなが理解の範疇を超えていたが、なんとなくそのニュアンスは理解できた。せつなは地球ではファンタジーなどが割と好きだったことも、その理解を多少は助けていた。こういう場合は、わからないことは置いておくに限る。

「では、この剣を抜いていただけますか？」

ぼんやりと考え込んでいたせつなに少女は再び声をかけた。

「えーと、何で封印されたか、わからないんだよね？」

せつなは、少女を見て考え込んだ。こういった場合、見かけにだまされて封印を解くところくな目に会わないと直感が告げていた。

「いきなり暴れだすとか、世界を滅ぼすとか、そんなことしない？」
封印とは普通はそういうことをしてされるものだ。まさか無害な人間が意味もなく封印されたりはしないだろう。

「私に世界を滅ぼす力はありませんし、暴れだしたりもしません。

失礼です」

「じゃあ、いきなり体から悪魔が出てくるとか、姿が不気味になるとかもない？」

「そんなことはありません」

少女の声は何処となく不機嫌そうに返事を返した。確かに無神経な

質問だったかもしれない。まあ、もし今言つた事が事実だったとしてもそれを認めるはずはないが。

「んー」

さてどうしたものか。軽々しく封印など解いていいのだろうか。しかし少女は何も覚えていないそうなのでこれ以上情報は出でこないだろう。それが嘘の可能性もあるが、せつなにはそれを確認する手段はない。

「とりあえず俺がどういう状況なのか、もつと詳しく教えてくれないか?呼んだってどういうことだ?」

せつなは話を先送りにすることにした。目を周囲に走らせた。妙に現実味がなく、曖昧な世界だ。その異常さは、世界の狭間という場所を感じてしまいそうなほどだ。

「ここは死後に魂がやってきて、去つていく場所です。あなたの魂もこの場所へやってきて、去ろうとしていました。しかしあなたの魂は私と相性がよかつたようなので、呼べるかどうか試してみたのです。結果は、私はほとんどの力を失いましたが、あなたを呼び寄せることに成功しました」

相も変わらず少女は無表情に言つた。

せつなは何処に突つ込むべきなのか思わず迷つた。

「魂を呼んだってことか?体はあるようだが?」

「この場所は物質的なものが絶対ではない所です。普通の存在では、自我を保つことすら難しいでしょう。しかしあなたの魂は私の魂の一部で欠けたところが補われています。だからこの場所でも自我を保つことが出来ます」

せつなはその言葉を聞いて、思わず魂がどういふものなのか聞きたくなつたが、何とかそれを堪えた。今余計な質問をすると、訳がわからなくなるだろう。

「つまり俺の体はないつてことか?」

「はい」

せつなは自分の体をじっくりと見渡したが、特に変わつたようには

見えなかつた。服も高校の制服を着たままだ。

「本当に？証拠は？」

「証拠……ですか？ ううですね、跳んでみてください。じゃんふです」

無表情の少女は、その口調に似合わない言葉で返事をした。せつなは少女の顔を見つめ、本気の色を見て取り、軽くひざを曲げ跳躍の準備をした。

「じゃ、跳ぶぞ？」

「どうぞ」

せつなは軽く跳んだ。体は上へ向かって跳び、普段なら重力を受けたて力の向きが変わるであろう場所を過ぎても体は速度を緩めなかつた。

「……なんだこれ。どうなつてるんだ？」

「ここは物質的なものが絶対ではない世界だと言つたはずです。理解していただけましたか？」

少女の距離はすでにかなり離れたにもかかわらず、少女の声は跳ぶ前と同じように聞こえた。

「うう……。つてちょっと待て止まらないぞ、これー。」

せつなの体は上へ上へ上へ、

「ストップ。降ろしてくれー！」

せつなは思わず叫ぶように声を上げた。

「では、自分の下へ向かう姿をイメージしてください。出来るだけゆっくりがいいでしよう」

せつなはずいぶんと離れてしまつたはずなのに、やはり変わらず聞こえる少女の落ち着いた声を聞いて、自分を落ち着けようとした。

「無理、無理だ！」

「慌てる必要はありません。慣れたら降りてきてください」

「いや、高いつてー！」

その後、しばらくの間、せつなの絶叫が響き渡つた。

「はあはあ」

「理解していただけましたか？」

少女の無表情な顔を睨みつけ、せつなは苦しげに呼吸をした。

「ああなると、先に言っておいてくれ」

「大丈夫です。何の問題もありませんでした」

せつなは眼に力を込めたが、少女の表情が崩れないのを見て、やがて諦めたようにため息をついた。

「まあいいか。おっけ、信じた。なんかいろいろな事がどうでもよくなつた」

「そうですか」

「で、なんだっけ？ 剣を抜けばいいのか？」

「そうです」

せつなはちらりと少女の胸に突き立つている剣を見た。少女は黒いローブに身を包んでおり、顔を除くとその姿はまるで魔王が封印されているように見えた。

「なんか不安だ」

「気にしないで下さい。私は剣を抜いてもらい元の世界に戻り、自分が何者なのかを探す。あなたは自分の世界へ帰る。何の問題もないです」

せつなはその言葉に思わず驚いた。

「は？ って俺はどの言葉に驚けばいいんだ？ あんたが地球の人間じゃないのは……まあ、わからないこともないし、信じよう。問題は俺を地球に帰してくれるってことか」

少女は不思議そうにせつなを見た。

「何が問題なのですか？ アフターケアも万全です」

せつなは困ったように、腕を組んだ。

「いや、異世界に召喚されたらなんかこう、もつと……」

とそこで、せつなは何かに思い至ったかのように眼を見開いた。

「ちょっと待て、俺は魂の状態なんだよな？」

「ええ、ですが元の世界に戻れば再び肉体に縛られるはずです。少し人間離れするかもしませんが……」

「いや、それもあるが、そうじゃなくて。俺の死体があるんじゃないのか、地球には」

少女はわずかに眉をひそめた。

「そうですね、死体はあるでしょう。しかし、元の世界に帰りたくないのですか？」

その質問にせつなは曖昧に笑った。

「んー、どうなんだろうな、実際。まあそれはいいとして、君のいた世界はどんなところなんだ？」

せつなは曖昧な笑みから一転し、楽しそうに少女に聞いた。

「私のいた世界、ですか？すみません、あまりよく覚えていません」

少女の答えにせつなは不思議そうに首をひねった。

「わからないのか？それでもその世界に帰りたいと？」

「ええ、私の記憶を取り戻すことも出来るかもしれませんし、ここにいるのも飽きました」

少女の変わらない表情を見つめ、せつなは剣を抜いて封印を解いてもいいかなという気になった。そしてそのために、もう少し少女のことを知ることにした。

「じゃあ、あんたの覚えていることは何だ？」

「覚えていることですか。そうですね、まず神としての力の使い方は、覚えていたというより最初から知っていました」

「神？」

せつなは思わず素つ頓狂な声を上げた。

「ここまで来ると何でもありな気がするが、それは……」

「しかし、これに関してはもういいです。私は人間になりかけていますから」

「はあ」

少女はそのことにほとんど関心がないかのように言った。

しかし、考えてみると少女はせつなの魂を呼び寄せ、補つたというようなことを言っていた。もしそれが本当なら人間業ではない。まあ、少女がもういと言つなら気にする必要もないだろう。そこでせつなは一つの疑問に思い至った。

「封印されているのに、何でそんな事が出来るんだよ？」

大きな力を持つているとしても、封印されているならそれは使えないはずだ。

「私が目を覚ましたとき、封印は少し緩んでいましたから。最も、無理して力を使つたことには変わりないので、もうほとんど神としての力は失われ、人に近付いていいようですが」

「その人に近付くつてのは、どういうことだ？」

少女は胸に突き刺さった剣を見つめた。

「この剣の持つ力の一つです。神を人に墮とす。そして私の力を封じる。神の力は人の身には大きすぎますから、神が人になれば自然と失われていきます」

「わかつたような、わからないような。……他に覚えていることは？」

「この剣についてです」

せつなは剣に目を向けた。剣は最初に見たときと変わらずに、奇妙な不気味さをかもし出している。

「今この剣は、力を込めて引き抜けば封印が解けるようになっています。これは恐らく過去の記憶ですが、本来なら引き抜くことも出来ないようになっていたことをかすかに覚えています。記憶を失う前の私はこの剣を今の状態にして、力尽きたのでしょうか」

なるほどとせつなは思つた。確かに剣を抜くだけで封印が解けるというのは危険極まりない。

「封印が解けた際には、この剣はあなたに差し上げます。この剣には様々な力が込められているようなので、お役に立つでしょう」

せつなは困ったように少女を見つめた。

「そんな曰くありげな物をもらつてもな」

思わず地球でその剣を振るつてゐる光景をせつなは思ひ浮かべた。

間違ひなく捕まるだらう。

「LJの剣はあなたに害をなす」ことをしません。必ず役に立つでしょう。私は使う気がしませんが」

それは自分を今まで封印していた物を使いたくはないだらう。

「私が覚えていることはこれぐらいです。ではこの剣を抜いて、封印を解いていただけますか?」

せつなはわずかに思考して口を開いた。

「俺もあんたの世界に連れて行ってくれるなら、封印を解いてもいい」

代わり映えのしない日常だと思つてゐた。毎日学校へ行き勉強する。目的もなくただその行動を繰り返す。そしてそのまま社会に出て働いて生涯を終える。もちろんそれを幸せだと感じる人もいるのだろうが、せつなはそいつた人間ではない。生きていく以上何か確固たる目的が欲しいし、ただ日常を惰性で過ごすのではなく、思いきり楽しみたい。そして地球ではそのように日常を過ごせなかつた。ならば、違う世界に行ってみるのも悪くはないだらう。どうせ、もう死んだ身だ。地球に戻つて大騒ぎになるのも面倒だ。

少女はじつとせつなを見つめ、口を開いた。

「あなたが望むのなら、構いません」

「ついでにあんたについて行くことにするよ。なんか危なつかしそうだし、命の恩人みたいなもんだし、一人じゃ寂しいだらう?」

せつなが笑いながら言うと、

「別に寂しくありませんが、好きにするといいでしよう」

少女はどこか拗ねた様にそう口にした。

せつなは少女のその様子が子供っぽく見えて、さらに笑みを深めた。

「そういえば、自己紹介がまだだつたか。俺は堂島せつな……いや堂島は要らないか。ただのせつなだ。家族も友人も捨てて君についていくろくでなし。どうかよろしく」

せつなは大げさに少女に向かつて礼をした。

「私は記憶を失った神が人間になりかけている存在です。名前は知りません。よろしくお願ひします」

少女は軽く頭を下げる。

「しかし、名前がないのはなあ。呼ばれたいリクエストはある?」「好きなように呼んでください」

「そうだな、君は魔王っぽいから、ディアボロスからとつてディアで」

「ディア、ですか」

「そう。いやか?」

「いえ、それで構いません」

少女は不思議そうにディアと小さく呟いた。

せつなはゆっくりと少女、ディアに近付いていき、柄に手をかけた。不思議と不安はなくなっていた。

「いぐぞ?」

「どうぞ」

その声が終ると共に、せつなは剣を引き抜いた。ほとんど抵抗もなく、その剣は拍子抜けするほどあっさりと抜けた。

「やけにあっさりしてるな」

せつなが少女の胸元を見ると、刃による傷跡はなく血も出でていなかった。

ディアは両手をついて上体を起こし、それを見たせつなは座つているディアにゆっくりと手を差し伸べた。

「ほら、つかまれ」

ディアは不思議そうにせつなを見て

「ありがとうございます」

その差し出された手につかまり立ち上がった。

せつなはそれを見届けると、自分が持つ剣をしげしげと見つめた。

「しつかし、この剣は軽いな」

「ええ、あなたを扱い手と認めているでしょつから」

「扱い手?」

「持ち主のようなものです。抜いた人がそうなるよう元に戻さなければなりません。無くしても手元に戻つてくるようになります」

「それは便利だ」

その紅い刀身の剣は、せつなの手に不思議と馴染んだ。

「つて、よく考えたら俺は剣なんてほとんど使えないぞ？軽く剣道をかじつた程度だ」

「ではこれから使えるようにしておけばいいでしょ」

「せつなはティアの全くの正論に肩をすくめた。

「まあそれはいいけど。しかし、でかくて邪魔だな」

せつなのこぼした愚痴に、ティアは何かを考え込み

「それはどうにかできるかもしません」

柄を握るせつなの手の上に、自分の手を重ねた。

「……何やってる？」

せつなはティアの顔が近付き、上擦つた声をだした。ティアはそれには答えず、手を重ねたまま黙り込んでいる。

そのまましばらく時間が過ぎて、ティアはよつやく声を発した。

「縮め」

その言葉に合わせて、せつなの手の中にあつた剣はナイフ程度の大きさになつた。

それを確認したティアはよつやく剣から手を離し、せつなもよつやく胸中の混乱から開放された。

「……小さくなつたな」

せつなはほつとしたような呆れたような声で言つた。もうこの程度では驚かなくなつていた。剣が縮んだことよりも、ティアが近付いてきたことのほうが焦つた。

「はい。この剣ならば、これぐらこのことは出来ます。私も随分と長くこの剣に封印されて付き合こも長いですから、それくらいはわかります」

「元に戻すにはどうしたらいいんだ？」

「戻れと命じてください。その後縮めたくなつた場合は、先ほど

「よう」縮めと命じてください」

「なんか魔法つぽいな」

せつなは感心したように剣を見つめ、何度も縮め戻れと繰り返しその大きさを変えた。

「あとその剣を元に戻した際には、全てを切り裂くといつ異質な力を持つてはいるので取り扱いには注意してください」

「……なんかよくわからんが氣をつける」とするよ

せつなはどこか疲れたかのように言った。

「本当に氣をつけてください。恐るべドーラゴンすら簡単に切り裂けるようなものですから」

「ディアのいた世界には、そんなのがいるのか？」

「それはわかりません」

せつなは怪訝そうにディアを見つめた。

「知識としては知っていますが、いるかどうかはわかりません」

「いや、知ってるんならいるんだろ?」

「そうでしょうか?」

「俺に聞かれても困る」

せつなはじつと見つめてくるディアを見て、ため息をついた。

「そうだな、他に知っている生き物は?」

「……少し待ってください」

ディアは額に手を当てて悩み始めた。せつなはその姿を見てやはり放つてはおけないと思った。絶対に人に騙されるだろう。本人は騙されても気にしなさそうだが。

「エルフ、フェアリー、ドワーフ、人がいました。他にも少數種族が割とたくさんいたような気がします。……どうやら封印が解けて少し記憶が戻ってきたようです。私がいた世界にはそれらが生きていました。最もどれほど昔の出来事かわからないので、現状はどんな生物がいるのかわかりませんが」

「それはまたファンタジーな生物構成だ。じゃあ、魔法なんかもありますだな」

「魔法……あります。思い出しました」

「それはそれは。楽しそうだ。ディアは使えないのか？」

「はい。神が使うものも魔法のようなものですが、私はその力はもうほとんど使えません。人などが使う魔法は詳しくは知りません。忘れているだけかもしませんが」

「それじゃそれら諸々を、そろそろ見に行こつか」

せつなは短剣を腰のベルトに差した。そして何かに気付いたのか、不思議そうに口を開いた。

「全てを切り裂く剣なんてのが胸に刺さつてたのに、よく封印で済んだな」

「私に刺さつていたときは、そのような力はありませんでした。私が先ほどその剣の力を変えました」

せつなは呆れたようにディアを見つめた。

「そんなこともできるのか」

「はい。その剣はそれだけの力を秘めています」

ディアと話が噛み合つていないことにせつなは気付いた。

「いや、剣がじゃなくて、ディアがその力を変えた事がだ」

ディアはせつなによくわからないと言つようの顔を向けた。

「それはたいしたことではありませんが？」

どんな物でも切り裂くというのは十分にたいしたことだらう。何もわかつていないうな表情のディアに、とりあえず心の中で突っ込みせつなはそれ以上の質問をやめた。どうせ言つても無駄だらう。

「それでは私は元の世界に戻りますが、あなたも本当についてくるのですか？あなたの居た世界にはもう一度と戻れなくなりますが、それでもいいのですか？」

「構わない」

せつなは何の躊躇もなく言い切つた。まるで、地球に対しても一切の未練がないと言つよう。ディアはそれを確認すると

「では行きましょう」

そう言つた。それで終わりだった。せつな目の前の光景は白い何もない空間から、いきなり薄暗い森に変わった。

「はい？」

それを見て奇妙な出来事に対する耐性ができていたせつなも、呆然と声を上げた。

「これで神としての力は全て使い果たしました」

ディアは何の感情も見せずに咳くと、歩き出した。

呆然としていたせつなは、自分から離れていくディアを慌てて追いかけた。

こうして記憶を失った元女神様と、地球の少年との旅が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6021c/>

少年と魔剣と元女神

2010年12月31日05時21分発行